

飛鳥時代の演劇

——特に伎樂に就いて——

松 本 義 圓

妙法蓮華經法師品第十 (Dharmabhanaka) の中に

「爾時佛復告藥王菩薩摩訶薩。我所說經典無量千萬億。已說今說當說。而於其中。此法華經最爲難信難解。藥王。此經是諸佛祕要之藏。不可分布妄授與人。諸佛世尊之所守護。從昔已來未曾顯說。而此經者。如來現在猶多怨嫉。況滅度後。藥王當知。如來滅後。其能書持讀誦供養爲他人說者。如來則爲以衣覆之。」

「不須復安舍利。所以者何。此中已有如來全身。此塔應以一切華香瓔珞繒蓋幢幡伎樂歌頌。供養恭敬尊重讚歎。若有入得見此塔禮拜供養。當知是等皆近阿耨多羅三藐三菩提。」

「若復有人。受持讀誦解說書寫法華經乃至一。於此經卷敬視如佛。種々供養香瓔珞末香塗香繒蓋幢幡衣服伎樂。乃至合掌恭敬。藥王當知。是諸人等。已曾供養十萬億佛。於諸佛所成就大願。愍衆生於未來故生此人間。」

「藥王。若有入問何等衆生於未來世當得作佛。廣示是諸人等於未來世必得作佛。何以故。若善男子善女人。於法華經乃至一句。受持讀誦解說書寫。種種供養經卷。華香瓔珞末香塗香繒蓋幢幡衣服伎樂。合掌恭敬。是人一切世間所應瞻奉。應以如來供養而供養之。當知之人是大菩薩。成就阿耨多羅三藐三菩提。」

「藥王。其有讀誦法華經者。當知是人。以佛莊嚴而自莊嚴則爲如來肩所荷擔。其所至方應隨向禮一心合掌

恭敬供養尊重讚歎。華香瓔珞末香塗香燒香繪蓋幢幡衣服餽饌。作諸伎樂。人中上供而供養之、應持天寶而以散之。天上寶聚應以奉獻。所以者何。是人歡喜說法。須臾聞之。即得究竟阿耨多羅三藐三菩提故。

ごあります。これは佛法僧三寶の功養に關する一節であつて、云ふ迄もなく、第一句は經典功養を説き、功養者は如來の加護あること示され、第二句は佛に伎樂等を供養した者は Sunnata Samyak-Sambodhi の呎地に近づく云ふのです。第三句と略同意であり、第四句は供養の所致方は、諸の伎樂を作し、其他を云々せよと表はれてゐます。

更に、妙法蓮華經見寶塔品第十一 (Sūpasandarsana) の中に

「三十三天。雨天曼陀羅華。供養寶塔。餘諸天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等千萬億衆。以一切華香瓔珞幡蓋伎樂。供養寶塔。恭敬尊重讚歎。爾時寶塔中出大寶聲。歎言。善哉善哉。」

ご寶塔供養にも伎樂等を以てすること記されてあります。又、同經提婆達多品第十二 (Devadatta) の中にも

「諸天人民悉以雜華末香燒香塗香衣服瓔珞幡幢寶蓋伎樂歌頌。禮拜供養七寶妙塔。無量衆生得阿羅漢果。無量衆生悟辟支佛。不可思議衆生發菩提心。至不退轉。」

ごあります。これは伎樂等を以て七寶妙塔を供養する事により阿羅漢果を得、辟支佛を悟り、不退轉に至ること説かれてあります。

阿羅漢は (arhan arhat 巴 arha 西) dgra-bon-pa 殺賊の義で、略して羅漢、又は囉呵と云ひます。廣供、殺賊、無生、離惡、又は廣、廣眞、廣儀等と譯し、聲聞四果の一であります。大毘婆娑論第九十四に「世間の勝供養を受くるに應するが故に阿羅漢と名づく。復次に阿羅漢は一切の煩惱を謂ひ、漢は能害の意。利慧の刀を用ひて煩惱の賊を害し、餘なからしむるが故に阿羅漢と名づく。復次に羅漢は生と名づく。阿は是れ無の義なり。無生を以ての故に阿羅漢と名づく。彼れ諸界諸趣に於て復び生ぜざるが故なり。復次に漢は一切の惡不善の法に名づく。阿羅漢と云ふ

は是れ遠離の義、即ち諸惡不善の法を遠離するが故に阿羅漢名づく。こあります。又、大智度論第二には、殺賊、不生、廣受供養の三譯を出し。同第三には賊破、廣供、不生の三義を擧げてゐます。成唯識論第三に「阿羅漢は通じて三乘の無學果を攝す」こあり。大品般若經第六には之を已作地名づけ、菩薩十地中の第七位に置いてゐます。

不退轉は梵語の阿毘跋致であり、所得の功德善根に於て愈々増進し、更に退夫し轉變しないのです。無量壽經上に「聞我名不即得至不退轉者不取正覺」。法華經序品には「此於阿耨多羅三藐三菩提不退轉」。又、十住毘婆沙論に「若人疾欲至不退轉地者應以恭敬心執稱名號」こありますが、伎樂等を供養する事により、この阿羅漢を得、辟支佛を悟り、不退轉に至るのであります。

又、同經如來壽量品第十六 (Tathagatayuspramana) の中に

「阿逸多。是善男子善女人。下須爲我復起塔寺及作僧坊以四事供養衆僧所以者何。是善男子善女人。受持讀誦是經典者。爲已起塔造立僧坊供養衆僧。則爲以佛舍利起七寶塔。高廣漸小至于梵天。懸諸幡蓋及衆寶鈴。華香瓔珞末香塗香燒香。衆鼓伎簫笛箏篳篥種種舞戲。以妙音聲歌唄讚頌。則爲於無量千萬億劫作是供養已」こあります。

更に又、同經囑累品第二十二 (Anuparidana) に一節に

「諸寶善上。各有百億諸天作天伎樂。歌歎於佛以爲供養。」

こ記されてあります。又、同經妙音菩薩品第二十四 (Candadasara) の一句にも

「爾時雲雷音王佛所妙音菩薩伎樂供養奉上寶器者。豈異人乎。今此妙音菩薩摩訶薩是。華德。是妙音菩薩。已曾供養親近無量諸佛。久殖德本。」

こあります。伎樂云ふ句を佛典より抽出す事は難事ではありせん。それ丈多く隨所に點在してゐるからです。

飛鳥時代の演劇と、前記の抽出との關係に少し異常な感じを懷かられるかも知れません。然し、次の章になり稍了解して頂くを考へます。それは聖德太子傳曆下卷(大日本佛教全書廿一頁)の中に

「又百濟味摩之化來白曰。學于吳國得伎樂舞。則安置櫻井村。而集少年令習傳。太子奏。勅諸氏貢子弟壯士令習吳鼓。又下天下令擊鼓習舞是令財人之先。太子從容謂左右曰。俳養三寶用諸蕃樂。或不肯學習。或習而不佳。而今家業習傳。宜免課役。即令大臣奏免。」

とあります。聖德太子が何故かくも伎樂を推勵されたか云ふは、實に前記の佛典に基づかれた結果であります。

法王帝説に依れば、欽明天皇即位前十四年、戊午の歲(582)に佛教傳來してゐます。それ迄に、新羅、百濟の入貢があり、支那文明の移入地である朝鮮との交渉は、次第に濃度を深めてゐます。

阿直岐、王仁、辰殘王が將來して、應仁天皇の太子、菟道稚郎子の師となり。之等の子孫は何れも文筆を以て日本文化に貢獻し。高麗、百濟との戰亂地に居住してゐた漢人が、日本に渡來して、文物を傳來し。融通王は百廿縣の民を率いて百濟より歸化し。阿知使主と、その子、都加使主は十七縣の民を率いて、帶方から歸化してゐます。

聖德太子傳曆に依れば

「六年丁酉公十月。遣百濟國大別王持經論並律師禪師比丘尼等還來。」

「八年己亥冬十月。新羅國獻送佛像。」

「百濟賢者羣北達卒日羅。隨我朝召使吉備海部羽島來朝。」

「十三年甲辰秋九月。彌勒石像一軀。佛像一軀百濟將來。」

崇俊天皇

「元年戊申春三月。百濟國使並僧惠聰令欣。惠寔等來獻佛舍利。又恩卒。首信等來進調。別獻佛舍利並僧聆照。律

師令威。惠衆。惠宿。道嚴。令關等。寺工一人。鑪鑿師一人。造瓦師二人。畫工一人。」

「三年^{庚戌}春三月。學問尼善信等。自百濟來。」

「五年^{丁巳}夏四月。百濟王使。王子阿佐等來。調貢。

尙、聖德太子傳曆卷下に

「十六年^{戊辰}夏四月。小野臣妹子。至自大隋。々朝使裴世清等十二人。從妹子來至子筑紫。到難波館。」

「十八年春三月。高麗使徵。法定二口來。」

と記されてあります。以上は太子在世迄の記録でありますが、此等支那及び朝鮮の文化と佛教の傳來は、當時の固有日本文化に異常の影響を與へたことは勿論と考へます。加ふるに、太子の佛教中心の御政治は、從來の日本風俗に幾多の佛教的風俗を抽出し、茲に飛鳥時代演劇の骨頂をなす伎樂を産出し、それが平面的には當時の日本全土に、立體的には現代に至る迄流行するに至りました。（太子の佛教中心と申しましたが、これは「諸佛の道、敢て諸神に逢はづ。」と奏せられたる如く、佛神一如の宗教觀であります）。

聖德太子の御政治の態度は、太子鑒製の憲法十七條に

「二曰。篤敬三寶。三寶者佛法僧也。則四生之終歸。萬國之極宗。何世何人非貴是法。人鮮尤惡。能教從之。其不歸三寶。何以直枉。」

とあり、太子の御行情は傳記を讀みましても判る如く、深く佛教に基本を置かれてあります。高麗の僧慧慈、百濟の僧慧聰等を師とされ、又、推古帝の六年四月十五日には、勝鬘經を宮中に講ぜられてゐます。

「戊午年四月十五日少治田天皇請上宮王令講勝鬘經其儀如僧也。諸王公主及臣連公民信受無不嘉也。三箇月之内、講說訖也。」

ミ法王帝説には記されてあります。

又、他面には幾多の寺塔を建立されました。太子傳古今錄抄には、左の如く記されてあります。

一 太子造ミ立八箇寺ニ事。

七代記云。上宮太子造ミ立寺舍ニ八

八所 四天王寺。俗號ニ荒陵寺一。

法隆寺 時人名爲ニ解僧寺一。

法興寺 時人呼爲ニ解尼寺一。

法起寺 時人號爲ニ池後寺一。

菩提寺 時人呼爲ニ橘尼寺一。

定林寺 世人爲ニ立部寺一。

妙安寺 世人名爲ニ葛木尼寺一。

廣隆寺 國ニ蜂岡寺號

一伽藍者。塔。金堂。講堂。鐘樓。經藏。僧坊。食堂。此七種一伽藍ト云也。太子御建立奉爲天皇造ニ營七ヶ

寺。除廣隆寺。云々

又云。邦有ニ神珠ニ者。蟲魅莫ニ侵レ之。國興ニ三寶ニ。亦有ニ何禍ニ哉。云々又云。住ニ法隆學問寺ニ僧侶。毎年九旬。

令レ講ニ法花。勝鬘。維摩三部經。法輪常轉而濟萬民。紹隆三寶。以護ニ率士。云々

寺院建立ミ共に、佛教儀式も制立され、茲に伎樂が法華經思想を基本として三寶供養の爲めに採用されました。かくして印度、支那、朝鮮ミ經歷した伎樂は日本佛教儀式の一つとして、廣く全國に流漲しました。

當時、日本にはアイヌ種族の祭祀舞蹈より發芽した演劇ミ、固有日本人の祈禱舞蹈より發生したもののミ、隼人種族の戰鬪舞蹈より傳つた演劇ミが並存してゐました。此等は互に相影響し乍ら飛鳥時代に傳りました。

伎樂が此等ミ異る所は、對象が佛法僧であり、印度古代舞蹈に其源を置く、純生たる傳來ものであることであります

然し、伎樂を嚴密に觀れば前三者と同様、劇的性能を具備し乍ら、未だ純粹劇ではなく、宗教儀式の一部をなす宗教舞蹈であります。更に深く考へれば、伎樂の役割は宗教の一要具として、其使命を果すものであります。

従つて、伎樂の内容は、佛教信徒教化の思想が包含されてゐます。

伎樂は梵語 Vadya の譯で、西藏語 rd-mo 音樂の意であります。長阿含第十一善生經には「伎樂の六失を擧げてゐます。六失とは一に歌を求む、二に舞を求む、三には琴瑟を求む、四には波内卑し、五には多羅槃、六には首呵那なり。とあります。雅樂の一種であつて、又、吳樂とも云はれてゐます。望月信享氏は「吳樂とは吳國より傳はりたる樂なるを以て此名あり」と説かれて居ますが、灰野庄平氏は歴史的に吳國を詮索され、「(一)は周の文王の伯父太伯の建てた國で、これは吳越の名によつて知られてゐる國で(478BC)に亡ぶ。(二)は後漢の後に鼎立した三國の一で、孫權の蜀に建つた國であるが(880AD)に晋に亡ぼされてゐる。(三)は唐の昭宗の世に淮南の節度使となつた揚行密の建てた國で(30AD)に滅んでゐる。支那歴史中、吳と呼ばれた國は以上の三丈けである。味摩之の歸化は(612AD)であるから此三吳と前後して同時代でない。故に味摩之の學んだ吳は、歴史上の吳でない」。と申されてゐますが、それはそれとして伎樂が舞劇の意であり、これを伎樂舞、ぐれの樂劇と詠んだのは、日本傳來後らしいと云ふ事は一致してゐます。伎樂の種類は、獅子、迦樓羅、波羅門、窣曇、力士、大孤、醉胡、武德樂、吳公等とされてゐます。

「迦樓羅」は、迦樓羅を本尊とし、疾病、風雨、落雷の災を除く修法で、舞蹈「迦樓羅」はその意味を含んだ舞蹈であります。

迦樓羅 (Garuda) は迦留羅、迦婁羅、揭路茶、迦樓羅、誠嚕拏、葉嚕拏とも譯されてゐる鳥名であつて、舊譯では金翅鳥、新譯では妙翅鳥、頂癭鳥とあります。四天下の大樹に居り、龍を取つて食してゐるもので、八部衆の一であります。

法華經文句二下に、「迦樓羅。此云金翅。翅翮金色。居四天下大樹上。兩翅相去三百三十六萬里。」とあり、又、深玄記二には、「迦留羅。新名揭路茶。此云妙翅鳥。鳥翅有種種寶色莊嚴。非但金。依海龍王經。兵鳥兩翅相去三百三十萬里。閻浮提止容一足。依涅槃經。此鳥能食消龍魚七寶等。又依增一經。日別食一大龍王五百小龍。達四天下。周而復始。次第食之。命欲終時。諸龍吐毒。不能復食。飢火所燒。聳翅直下。至風輪際。爲風所吹。還復上來。往還七返。無處停足。遂至金剛輪山。頂上命終。以食諸龍。身肉毒氣。發火自焚。難陀龍王。恐燒寶山。降雨滅火。涕如車軸。身肉消散。唯有心在。大如睚。純青瑠璃色。輪王得之。用爲珠寶。帝釋得之。爲髻中珠。」と記されてあります。

迦樓羅は漸て迦樓羅法、迦樓羅觀と現れました。迦樓羅法とは迦樓羅鳥の修法であつて、其修法は「文殊師利菩薩根本大教王金翅鳥品一卷」、「速疾立驗魔醯首羅天說阿尾舍法一卷」に具さに其法が説かれてあり、其中心思想は迦樓羅鳥の神靈を以て惡龍の災ひを除くものであり、密門鈔抄にも、「伽樓羅大法は風雨を止め、及び惡雷の御祈」とあります。迦樓羅觀は、迦樓羅鳥の毒蛇の害を除く如し、諸の災害を除く觀法であり、微妙觀とも義譯されてあります。

伎樂の迦樓羅も、此迦樓羅觀を中心としてゐるやうであります。

伎樂迦樓羅に使用した面は、東大寺に一面、正倉院に一面殘存してゐます。正倉院のものは、殆ど全面綠色、頬耳の中嘴の下鶏冠が朱色で高さが一尺三寸、東大寺のものは、嘴が垂直に突き出て玉を含んでゐます。嘴及び頬の肉のひだの朱が古びて黒ずんでゐます。

「獅子」(Simha)は梵語で象伽、僧伽彼と云ひ、獸中の王であります。經中佛の勇猛を以て之に譬へてあります。無量壽經には「人雄獅子。神德無量」とあり、智度論には、「又如獅子四足獸中獨歩無畏能伏一切」。佛亦如是。於九十六種外道中一切降伏。故名人師子。」とあります。

獅子の傳説は多數ありますが、善薩瓔珞經九に、「師子に二子あり、獵者に殺され、舌者の家に生れて出家得道す」
あります。又、善財童子南詢第廿四參師子頻申比丘尼の一切諸寶樹下の大師子座上に端座するを見て、其德相を思惟し
十一喻を擧げてゐるが、唐華嚴經にあります。

技樂獅子は、羅、病氣、災過を未然に除く呪ひの意味が含まつて居り、この呪ひ、拂ひが民間信仰と結んで、今日迄
種々の形式になつて、傳つてゐます。

技樂の獅子はさう演出されるか、參考書に依れば大體次のやうであります。

舞踊の初まる前に、これに用ひる樂器調べが行はれます。その樂器は第一笛、第二銅拍手、第三腰鼓であります。笛
は七孔笛であり、銅拍子は金屬性の皿形のもので、これをつづ左右の手に持つて、打合せて其音を以て拍子を取り
ます。鼓は一の鼓、二の鼓、三の鼓、四の鼓に分れ、一の鼓が一番小さく、次第に大きくなつて、四の鼓に至ります。
腰鼓は其三の鼓であつて、兩面に皮が張つてあり、革面の直徑が一尺四寸、筒の長さが一尺五寸、筒の口徑が七寸二分
皮を調べる絲は黄色の絲を用ひてあります。

次に音取りを奏します。これは前記の樂器の調子を調べる一定の形式であります。

それから道行音聲を以て、舞人、樂人が登場します。

その順序は、第一に最初の舞踊を行ふ獅子が立ち、次に踊物が續き、この後に笛吹が立ち、次に幅冠が續きます。

次に打物（三の鼓が二人、銅拍子が二人）が續き、此等舞人樂人の座が定つて、舞踊が初まります。

技樂獅子が如何に舞踊されるか、以上の外に判明しませんが、これに用ひられた面が、正倉院にあると記されてあり
ます。

それは左右一尺一寸七分、高さが九寸八分、前後が一尺二寸ありまして、齒と眼睛とが黒、鼻端、眼、唇が赤く、眼

球ミ下唇が動くやうになつてゐます。頭に四角の孔があるのは耳のあつた痕だらうとされてゐます。

私達のよく見聞するものに、祭禮に行はれる獅子舞、歌舞伎所作事の「勢獅子」能の「石橋」、歌舞伎の「連獅子」等、恐らくその源流は伎樂の獅子より出たらしいとされてゐます。

第三は「波羅門」でありますが、天竺四姓 (Brahman 波羅門 Ksatriya 刹帝利 Vaiaya 吠舍 Sudra 首陀羅) の最高階級で、彼等は Brahman (梵天) の口より生じた最高貴種族であり、諸天諸神の聖旨を傳へる神聖な階級と認められてゐます。婆羅賀摩摩、沒囉憾摩も譯されてゐます。立應音義十八、慧琳音義廿六等に具説されてあります。

第四は「崑崙」、第五が「力士」ですが、崑崙には三つの解釋があります、一は國名で、これは堀倫のこゝで黒色人の住む國であります。今のジャワ、スマタラ等であつて、二は山名であります。これは支那西部の中央西藏の北部にある山脈であり、内典には所謂香山とされてゐます。又、香醉山と呼ばれ、雲山の北にあつて北の山の南に無熱池ありと傳へられてゐます。次は人名でありますが、これは崑崙奴と稱され、崑崙子、漆道人とも言はれてゐます。高僧傳五に「澄講安每覆述。衆末之愜。咸言。須待後次當難殺崑崙子。即安後更覆講。疑難蜂起。安挫銳解紛。行有餘力。時人語曰。漆道人驚四隣。」とあります。舞樂に「崑崙仙人」があり、これ崑崙山に住む奇鳥を表はしたのですが、伎樂「崑崙」は第三の人であるのが妥當性が多いやうです。

「力士」は金剛と共に佛法の守護神であります。参考書に次の如きことが記されてあります。

「崑崙」の曲に於て、五人の女現れて燈籠の前に立つ。その中の三人は打輪を持ち、その中の二人は袋を擔つてゐる。この後へ舞人二人現れて舞ふ。舞ひ終り、持つてゐる扇で五人の女を指し、その中の二人を懸想する様子を表す。こゝへ「力士」が手をたゞき乍ら舞ひ出る。「金剛」が門を開く。この金剛力士に先程の女に懸想した舞人、即ち外道の「崑崙」が降伏する。これに綱つけ舞ふ。こゝは筋であります。

次に「大孤」は老女の姿で子供二人に腰をおされて、膝をうたせて現はれ、佛前に參詣し、子供を左右に置いて佛を禮拜する。ミ云ふやうな簡單なものらしいです。

第七の「醉胡」は「醉胡王」ミ呼ばれ、舞樂中に「胡飲酒(Konju)」ミして残されてゐます。これは舞樂中の林邑樂であります。「胡飲酒」は一人舞で、容貌魁偉の面をつけ、頭の毛を左右に振分け垂らし、手に桴を持つて舞ふミ記されてあります。林邑ミは支那の南方の印度等の地方で僧佛哲の來朝した際に林邑樂を將來してゐます。この林邑八樂の中に「胡飲酒」があり、一名「醉胡樂」ミ稱し、伎樂「醉胡」もそれより流れてゐるやうです。

最後の「武德樂」は、武を以て亂を除く意味を表した小曲であつて、舞樂「武德樂」ミ大體同じやうであります。

「吳公」は、舞人が扇を持つて居た、樂人がこの曲を三返吹くミ云ふ事のみ傳へられてあります。

次に伎樂は如何なる衣裳樂律があつたかミ云ふ問題になりますが、法隆寺緣起資財帖には次の様にあります。

伎樂壹拾壹具

獅子貳頭

五色毛
在袴四腰

獅子子肆面 衣服具

治道貳面 衣服具

吳公壹面 衣服具

金剛壹面 衣服具

迦樓羅壹面 衣服具

崑崙壹面 衣服具

波羅門壹面 衣服具

孤子參面 衣服具

醉胡漆面 衣服具

又、西大寺資財流記帳の樂器衣服章には

「治道」「獅子」「吳公」「金剛」「迦樓羅」「崑崙」「力士」「波羅門」「大孤」「醉胡王」の項目があり、衣服としては、紫し施しの頭隱、黑紫綾の袍、白橡細布の衿、綠または緋の袷袴、紫または白の勒肚巾、雲縹錦の腰裳、白橡細布の幘子等が記され、唐の通典の四方樂の章に

天竺樂、樂工、皂絲布、幘頭巾、白絲襦、紫綺袴、緋毼舞、二人辨髮、朝霞袈裟があります。

樂律は參考書によれば下記のやうです。

「獅子」「波羅門」「崑崙」「力士」「醉胡」「武德樂」は一越調。「吳公」は盤涉調。「大孤」は平調。「波羅門」は拍子十一。「崑崙」は拍子十。

壹越調平調は十二調子の壹越の音を、五聲中の宮に置いた音階であり、平調は平調を宮に置いた音階であります。

かくて飛鳥時代に傳來した伎樂、聖武帝の天竺八年天竺の僧仙那と共に歸化し大林邑の僧、仙哲の將來した林邑樂と同處に起つたもので、その源泉は印度であらうと考へます。

私は支那、印度の伎樂の源流をたゞてて行きたいと考へますが、頁の都合上これで止め、又、機會がある時、印度古典舞踊と伎樂の關係について述べたいと思ひます。(七・十二・廿五)